

米欧亜回覧

第58号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集

広報メディア委員会

四月二十四日に総会(全体例会)開催

新方針の発表とブンブンミーティング

今回は年度替わりになるのでNPOとしての総会があり、二〇〇九年度事業報告と会計報告及び二〇一〇年度の方針、事業計画、新組織の発表などがある。また、総会後は泉理事長より新しい方針についての説明があり、それについて参会者全員によるブンブンミーティングを行う予定である。ついてはお繰り合わせご出席ください。

今年度の新年懇親例会は、一月十九日(火)、日比谷のレストラン・アラスカにおいて開催された。

泉理事長の「米欧亜回覧の会」なご、新方針については、

泉理事長の「米欧亜回覧の会」なご、新方針については、



2010年新年懇親例会

の基本理念と今後の展開について」を四頁に掲載しているので、よくご覧下さい。

の基本理念と今後の展開について」を四頁に掲載している

今年度の新年懇親例会は、一月十九日(火)、日比谷のレストラン・アラスカにおいて開催された。

今年がテーマ国別開催の十二回目、使節団訪問国をめぐる旅が一巡したことになる記念すべき会に、現役学生を含むセミフオーマル姿の百四名が参集し、華やかに、賑々しい催しとなった。

紋付袴の泉代表の挨拶に始まり、オランダ年に因み平戸藩主のご子孫で第四十一代当主の松浦章氏、使節団員ご子孫の方々、芳賀徹東京大学名誉教授、オランダ大使館のゲラルド・ミッヘルス全権公使を始めとする多くの方々のスピーチをいただいた。

(詳細は二・三頁)

久米邦武は

岩倉大使の機密吏官だった!

「米欧回覧実記」の編著者、久米邦武が正式に使節の随行者として辞令を受けるのはロンドン滞在中であつて、横浜出港時からそれまでどのような立場にあつたのかは不明であつた。岩倉大使の個人的な記録係ともいわれてきたが、このたび杉谷昭氏(佐賀大学名誉教授、現佐賀城本丸博物館館長)の調査資料によつてその具体像が明確になつた。そこで杉谷氏の了解を得て、五頁にその抄録を掲載する。

中国・歴史と上海万博の旅

六月十七日〜二十四日に決定

前号で既報の通り、この旅は、当会企画ならではの三つの目的がある。第一は「岩倉使節団の足跡を辿る」こと、第二は、その上海で催される万国博覧会を見ること、そして第三は、NHK「坂の上の雲」でも、当会の歴史部会でも大いに話題となつている「日露戦争」と「満州国」にまつわる史跡を訪ねることである。

スケジュールは、六月十七日出発、大連二泊、瀋陽(旧奉天)二泊、上海三泊で、二十四万八千円。詳細は同封別紙の旅行案内(募集要項)をご覧の上、希望者は早めに申込んでください。

幕末維新の時代、「文明」はまさに輝いていた。福沢諭吉や久米邦武が旅したころ、「西洋文明」は輝く「坂の上の雲」であつた。福沢にとつて「文明」の対極にあるものは「未開・野蛮」であり、日本にとつて目指すべきものは「文明」であり、自ら「文明」を使命とするなり」と宣言した。久米もその「文明」に酔い、その頂点ともいふべきパリを「文明都雅ノ尖点」といい、「巴黎ハ天宮ノ如シ」と讃えた。当時の日本人にとつて「文明」は「輝く星」であり、「文明開化」は国民的な合言葉になつた。

「文明」が輝いていた頃 福沢と久米の「文明論」

泉 三郎

むろん福沢も久米も西洋文明の影をみながつた訳ではない。西洋にも野蛮な面があり、影の部分があることを見抜いている。とくに久米は精神重視の東洋思想との対比で西洋文明の本質を鋭く衝いている。しかし、にもかかわらず西洋文明は間違いなく輝いてみえた。しかし、今、百数十年を経て、「文明の輝き」は大いにくすんだ。イメージは大きく変わり、「文明」という言葉自体、概念も、意味もさまざまに使われ、混乱している。少なくとも今日の日本人にとつて「文明」は西洋近代という意味では目標とすべきものではなくなつた。それは何故か。日本がその「文明」をすっかり摂取し自ら成熟化してしまつたからであらうか。あるいは「文明」の意味を誤解し外形ばかりに囚われているからか。あるいはその影の部分から腐敗が生じているからであらうか。「文明」はいまや様々な問題をはらみ、あきらかに「くすんだ文明」になつてしまつた。今や、日本はその先にある「新たな文明」を編みださなくてはならない立場にある。それにはすでに幾多の提言がなされてきている。いわゆる「森の文明」、「母性文明」、「美の文明」、「地球文明」など：しかし、いずれもなお説得力に欠ける憾みがある。わたしたちはいまこそ原点に返つて「目ざすべき文明とは何か」を真剣に考え直すべきではないか。その意味で福沢諭吉や久米邦武の記録は貴重なテキストだと思ふ。この二人の「文明への旅」をもう一度「学び直す」ことによつて、あるいは「未来」が見えてくるのではなからうか。

2010年
新年懇親例会

新年懇親例会は使節団訪問国を一巡
オランダをテーマに
華やかに、賑々しく開催



現在の平戸の画像とスピーチする
ミッヘルス全権公使

二〇一〇年新年懇親例会は、一月十九日(火)十八時三十分より、昨年と同じ日比谷のレストラン・アラスカにおいて開催された。
平成十年一月二十八日に第一回の新年懇親例会を国際文化会館で開催してから数えて十三回目、テーマ別開催が始まってから十二回目、今回で、使節団が訪問した十二カ国をめぐる旅が一巡した事になった。
今回は、テーマ国をオランダとしたが、昨春秋、この企画をオランダ大使館と協議・調整に入ったときが、まさに日本・オランダ年二〇〇八〜二〇〇九が終了しようとしていたタイミングであったことは、まことに意義深いことであ

あった。一六〇九年に平戸にオランダ商館が開設されてより四百年の節目の年でもあり、日・蘭交流の長い歴史を考えると、当会の新年懇親例会各国編の掉尾を飾るに相応しい会になったといえる。
会は、紋付袴に威儀を正した泉代表の新年挨拶から始まり、ついで来賓祝辞に移り、オランダ年に因み平戸藩主のご子孫で第四十一代の当主でおられる松浦章氏、使節団ご子孫を代表して大久保利泰氏、国際シンポジウムをはじめとして当会が日頃から指導をいただいている東京大名誉教授の芳賀徹先生、の三氏からすばらしいご挨拶をいただいた。最後にオランダ大使館を代表して、ゲラルド・ミッヘルス全権公使のスピーチと乾杯があり、第一部は終了し歓談の時間になった。(スピーチ要旨は後述)
ご来賓としては、三氏のほか、オランダ大使館から、報道・文化担当のバス・ヴァルクス氏(同氏の日本語はすばらしい)が出席された。大使館には貴重な四百年前のオランダ商館の銅版画や、オランダ

各地の風景写真のポスター、その他日本・オランダ年関連の沢山の資料をご提供いただいた。改めて、厚く御礼申し上げたい。
また、今回は当会幹事であり、日蘭協会会員(特に同会女性会員で構成されているリーフデ会ビジョン研究会の会員)でもある多田さんの誘いで、これらの会員の方々のご参加をいただき、交流を深めることが出来た。
また、今回は、記念すべき会でもあるので、多くの関係者のスピーチに時間さくこととした。ご登壇いただいたのは使節団のご子孫のなかから、和昭昭允氏(木戸孝允ご子孫)、岩倉具房氏、伊藤満洲雄氏、田邊康雄氏、また、リーフデ会の秋山夏子会長、オランダとの交流が深い佐倉市の蕨和雄市長からご挨拶をいただいた。
なお、食事は特別メニューで、オランダチーズ、鯿、ムール貝の料理を提供させていただいた。音楽(バックグラウンドミュージック)には大使館よりオランダ音楽名曲集のCDを拝借した。
司会は、前半を山田、後半を多田が担当した。参加者は百四名、学生さん(六名)を中心に若い方々の参加者が多かったのは喜ばしいことであった。

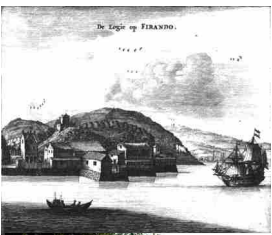
第2部でスピーチされた各氏



- (上段左から)
和昭昭允氏(木戸孝允ご子孫)
岩倉具房氏(岩倉具視ご子孫)
伊藤満洲雄氏(伊藤博文ご子孫)
田邊康雄氏(田邊太一ご子孫)
(右中)
秋山夏子氏(リーフデ会会長)
(右下)
蕨和雄氏(佐倉市市長)



第2部司会
多田幸子氏



オランダ大使館提供の画像をスライド投影(上)
平戸オランダ商館銅版画(下)
現在の平戸オランダ商館跡



平戸藩主ご子孫の松浦章氏(左)と歓談するゲラルド・ミッヘルス全権公使(中)オランダ大使館報道・文化担当バス・ヴァルクス氏(右)



会員の誘いで学生・大学院生も参加



右は参加者全員がいただいたオランダ大使館からの土産(資料および記念品)



最期に、簡単に新年懇親例会の歴史に触れておきたい。第一回は前述のとおり平成十年一月に開催された。「使節団」は旅の初めてのお正月(西洋暦)を、太平洋上の船の中で迎え、ボンケ(パンチ)パーティーをしたことが『実記』にも記載されており、これに因んで当会でも新年会を行った。

第二回はパリをテーマとして開催されたが、訪問国のテーマを恒例としたのは第三回ドイツ(銀座のビヤホール・ライオン六階を借り切っておこなわれた)からで第二回のパリ(フランス)から以降ドイツ、イギリス、イタリア、アメリカ、スイス、オーストリア、ベルギー、デンマーク、ロシア、スウェーデン、そして今年のオランダで、使節団が訪問した十二カ国を一巡したことになる。

この十二年間、各国大使館をはじめ多くの方々にご協力、ご支援をいただきました。また会員各位の熱心な支援体制、特に企画・折衝、会場の受付、設営、音楽、映像、写真の実務など、さまざまな分野での会員の力が高い総合力となって存分に発揮されたことが、これだけ長くこの新年イベントを継続する力となったものと思います。記して御礼を申し上げます。

挨拶要旨(第一部)



泉三郎代表

使節団は、一八七三年二月二十四日オランダに入りまして。寒い時期にもかかわらず、オランダではゆったりとした時間を過ごしたようです。それは両国の長年にわたる友好関係を反映したものであったでしょう。本日は、大勢の方々のご出席を頂き、御礼を申しあげます。一期一会の縁を結んで、懇親を深めていただければ幸いです。



松浦章氏

松浦藩(私どもは、マツロと呼んでいます。あの地域の古称、末盧国からきたものか)の平戸にオランダ商館が出来た四百年前のことですが、最初の頃は、蔵のついた民家を商館としていたよう

です。それ以来松浦家とオランダ国の関係は緊密であり、昨年、オランダ年の事業に協力して松浦資料博物館で展示会を開催しました。現在でもオランダから学ぶことは多いのではないのでしょうか。「和魂洋才」を大切にしながら、オランダとの友好を今後も深めてまいりたいと思います。



大久保利泰氏

私は利通から数えて四代目であり、松浦家が四十一代と伺いその歴史の長さに驚いております。本日は利通にかかわるエピソードを一つご紹介いたします。使節団はワシントン滞在中北部巡覧の旅に出てボストンで音楽会に招待されましたが、その時、ヨハンシュトラウスが自ら指揮をして、「酒、女、歌」を演奏したことが記録に残っております。実はこの時、利通は伊藤と共に日本へ委任状を取りに帰国していたので、折角の演奏会を聞いていないのです。利通が聞いていたらどんな感想を残したでしょうか。私は子孫として残念に思っているところです。



芳賀徹先生

オランダは、西欧諸国の中で、わが国が最も長く、親しく、和やかで(和蘭と言う文字が示すように)安定した関係を保ってきた国ですが、これは貿易を中心にして軍事、宗教を入れなかったことによるものでしょう。ことに幕末において、オランダが海軍伝習所などを通して、質の高い文明(学術・技術)を伝えてくれたのはオランダが日本にとつて、よき先輩、アドバザイザー、コンサルタント、そしてよき友であったことを示しています。この会の活動はかねてより承知していただき、今後ますます視野を拡大し、過去から現在に至るオランダの総てを研究して行くことを期待しております。(先生の挨拶は、幕末日蘭交流史とも言える内容で、総てをお伝えできず残念に思いますが、敷衍された主な人名を挙げれば、ケンペル、シーボルト、カピテン、ディーケほか七、八名に及び、また福沢、榎本ほかの日本からのオランダ留学生にも言及されています。)



ミッヘルス全権公使

岩倉使節団は、オランダ訪問において、産業界をはじめ各方面の人々と交流し、ディスカッションをしました。また大小の都市、大学(ライデン)美術館、博物館を訪問し、特にライデンでは、シーボルトのコレクションを見学しましたが、シーボルトのコレクションは現在の日本では入手できない物も多く、今でも研究者や、観光客が大勢見学に来ています。私の前のスピーカーの方々が言及されたように、オランダが、科学、教育、技術などの面で日本の進歩にささやかな貢献が出来たのであればまことに喜ばしく思います。以下日本語で「岩倉使節団の歴史と、世界のよりよき未来のために、教育、文化、科学の交流を重視している皆様と共に乾杯、両国の交流が永く続くことを祈って」(英語)



司会 山田哲司氏

(文責) 山田 哲司
(写真) 橋本 吉信

米欧亜回覧の会」の基本理念と

今後の展開について

(泉三)

会の活性化については、幹事会でも企画委員会でも議論がすすめられ、一般会員にもアンケートで意見を聞いてきた。それらの結果を踏まえ、次のような私案をまとめ幹事会でも検討中である。そこで総会ではこれらに基づく新方針をうちだす予定であり、その具体化について会員諸兄弟の理解と知恵と協力を仰ぎたい。

一、会の基本理念とアイデンティティ

当会の基本理念は、「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」のかかわりにある。会のアイデンティティとは何か、それは次の四つと考える。

①明治の使節団がもつていた公のための「使命感」、
「サムライマインド」②「米欧回覧実記」のもつていた「文明的」、
「グローバルな視点」③「日本近代史」を学んできた実績を踏まえての歴史認識、歴史的アプローチ④メンバーの日本の直面する現未来問題への問題意識と前向きの姿勢。

ここでいう「使命感」は全体に共通しており、②③④までは現行の三つの部会の活動に対応している。

二、今後の展開について
これまでの「内輪の勉強会」的存在から、外向けの開かれた「塾」的な存在に展開できないか。NPOとしてもそのことが望まれる。

例えば・・・
「米欧回覧実記を読む会」は「文明塾」へ、「歴史部会」は「歴史塾」へ、「現未来部会」と「グローバルジャパン研究会」は、「提言塾」(提言道場)へ。

三、具体的なプロジェクト案
当会メンバーの潜在力およびこれまでの実績を最大限に生かしながら、メンバーの相互研修と併せて若い会員の研修に寄与す。また、外部への啓蒙・啓発活動も行い、現下の日本の直面する諸問題にも提言していく。

①出版事業(「紀要」のような形式でもよい)。例えば、
・実記を読む会では、英語版に触発され「実記・ダイジェスト版」を編集出版する
・歴史部会では、これまでの「近代日本史の研究」から何らかのものをまとめる
・現未来またはグローバルジャパン研究会でも、その成果を出版・ネット発信する
②「岩倉使節団」と「米欧回

覧実記」をより広く知ってもらうために、大学院や各種研究団体、各種博物館他とのコラボレーションにより、全国的に講演会・映写会を展開する

③本会活動についてWEB、インターネットを活用する
研修内容や提言内容をウェブで流す。現行ホームページの活用、既存テレビ、ラジオ、出版とのタイアップ、映像、音楽の併用、最新のIT技術を活用する。

■歴史部会報告■

◎三井八郎右衛門高棟と団琢磨

二月二十二日開催、参加者二十名。

明治大学の名誉教授であり、現に「三井記念美術館」を管轄する「三井文庫」の文庫長でもある由井常彦氏にお話をうかがった。由井氏は日本経営史研究所の名誉会長を務められ、「人物で読む日本経済史」シリーズの十六巻の全巻監修もされているので、生き生きとしたエピソードを交えて三井の人間像を語られ大変興味ある講話だった。

人物については標題のお二人ばかりでなく、その周辺の、益田孝、岩原謙三、藤原銀治郎、武藤山治、小林一三などにも及び、経済人としての面よりもむしろ文化面、とりわけ茶の湯や美術とのかか

わりを重点に紹介された。

さて、三井家は十一家あり、総家だけで四家ある。その総領家が北家で、その当主が三井八郎右衛門高棟である。高棟は三井家と親しかった井上馨のすすめで幼少時からアメリカに留学し、帰国後は益田孝やその後継者となった団琢磨と協力して三井財閥の基盤を築き上げていく。そして一方では、茶の湯や能に親しみ、その保存普及につとめ、茶室「如庵」を移築し、美術品を集め、また能楽堂を建て能楽師を支援した。

益田孝は、三井物産の創業社長で三井財閥の形成発展に大きく貢献したが、一方で「鈍翁」と号する茶人であり、美術の愛好家、パトロンでもあった。その益田孝の後継者に指名されたのが団琢磨である。団は岩倉使節団に随行して十四歳でアメリカに留学し、MIT(マサチューセッツ工科大学)の採鉱冶金科を卒業する。そして、帰国後東大で教壇にたつが、そこでフェノロサと知り合い美術への関心も深める。団はその

後、三井炭坑に入り、画期的なポンプの採用で難題の出水問題を解決し、画期的な業績を挙げて三井のドル箱事業に仕立て上げる。そうした経歴から、益田は団を三井合名の理事長に推薦し、三井家との

間もとりもち、団は、その付託によく応えた。団はアメリカ留学の体験から日本にも経済人として大企業経営者の俱樂部が必要だとして日本工業俱樂部を設立、欧米人を招いてダンスも出来る設備ももつ堂々たる建築の俱樂部をつくり初代理事長になった。

また当時、英語でスピーチが出来る数少ない財界人でもあったので、大正期に敢行された米欧派遣の財界使節団の団長となり、MITでも「技術の使命と本質」と題して演説をし喝采を得る。そのスピーチが有力者にも大いなる感銘を与え、それが契機となって東洋人への評価が高まり、以後MITは東洋からの留学生に門戸をひらくようになり、ボストンでの東洋美術への関心も高まったという。

三井家の人々は高棟はじめ各家の当主も、また三井グループの益田をはじめ団や岩原謙三、藤原銀治郎、小林一三なども茶の湯に親しみ、美術品を愛好し、日本の伝統文化の保存維持に貢献した。

さて、現代の実業家、財界人はどうでしょう。「先人たちに倣いたいところですが、茶の湯や美術愛好を始めるのは、まあ還暦あたりからでもいいのではないか」とのお話でした。

(文責) 小野博正

米欧回覧実記・異聞 久米邦武は機密史官(吏官)だった！

杉谷 昭

佐賀城本丸博物館の館長である杉谷昭先生(佐賀大学名誉教授)から、このたび「葉隠研究」(葉隠三百年特集号。二〇一〇年二月二十三日発行)の寄贈をうけました。その中に『米欧回覧実記』・異聞という極めて興味ある小論がありますので、先生のご了解を得て抄録転載させていただきますことになりました。岩倉具視の書翰他によって当時の生々しい状況がよく伝わってきます。論拠になる資料は、主に「岩倉具視関係文書」全六巻の中にある「岩倉具視書翰集」です。

なお、先生は平成十七年四月の本例会で「和魂漢才から和魂洋才へ・久米邦武の知的背景」についてご講演をいただいております。内容はニュース三十九号に掲載されています。(泉三郎)

【抄録】

(一) 久米邦武の特殊任務

①明治四年十一月二十六日、太平洋にて、東久世通禧代筆(東久世は宮内省・侍従長の立場で使節団に参加・筆者注)の太政大臣三条実美宛書翰は、サンフランシスコ到着の報と、「昼夜間断無く走

艦、太平洋の名称、空しからず、風波平穩、座したるが如し、一同従容、愉快の到に候、御国人、乗組総計一百三十六人、内婦人五人、到末に、一人之病患もこれ無く、幸甚、これに過ず候、「として」「万端御安心の為、一筆ながら、飛脚船、洋中行合候旨二つき、早卒、相認申候」と前置きをして、さらに、「木戸・大久保輩よりも宜しく申上べき旨ニ御座候」、「西郷・大隈・板垣へも宜しく、御鳳声給うべく候」などとあり、岩倉の子供二人も「至つて無事」と私的なことも伝えている。また和歌五首も詠んでいる。

②明治四年十二月二十一日、サンフランシスコより、東久世通禧代筆による三条宛。前文につづいて十五項目述べているが、その第四項に、

「発途前、俄ニ願立、久米某召連れ候、右は、機密史官ノ処ニ申し付、書記官ニ管せず、公私混交、聞見ニ任せ、諸事書付致させ候、上の御慰にも相成り候哉と御賢考次第、宜しく参議中ハ勿論、外務省副島・寺島等へ御見セ相

い願ひ候、出船指急候間、清書の暇これ無く、草案の俣さし上げ候」とあって、久米の登用は特別の配慮であったことがわかる。実際に久米が「権少外史」に任命され、同時に欧米出張命令が出されたのは明治四年十一月五日、出発十二日の七日前であった。これに関連する史料を他にもとめると、前述の「米欧滞在中書翰」二十三通のうち(四)明治四年十二月十九日付・三条宛書翰の綱文をみると、

「発途前願立て久米某召連れ機密吏官の処に申付け、公私混交聞見に任せ諸事書付、(中略)そして後段では「久米少史へ仰付の別記録草稿未だ到達せず、着けば早々御覽に呈すべし、他」となっており、内容は天皇上覧のこともあり、「時々刻々」の報告が求められていたことがわかる。(中略)つまり、極端な場合は「天覧」のことも示唆されていたことになる。現在、久米美術館蔵の膨大な史料、久米が海外から蒐集した銅版画・絵はがき・写真などは、久米の任務遂行の強い責任感がうかがわれる。従来、単に彼の好奇心と研究心の結果とみられていたが、岩倉の命令と期待にもとづくところも大きかったといわなければならぬ。

(二) 「三条使節団」構想のこと

大久保利謙先生も『岩倉使節の研究』(宗高書房・一九七六)において、廃藩置県(七月十四日)が断行された翌年の明治四年八月二十日ごろ、大隈は条約改正交渉のための使節の派遣と、みずからその使節になることを發議して、閣議はそれを、一応内定した(推定)と推論されている。しかし大隈主導から岩倉(大久保)主導へ移行した経過については、未だ明らかではない。(中略)

勝田政治『政事家』大久保利通(講談社選書メチエ・二七三・二〇〇三年)では、

「この發議により(明治五年五月二十六日・交渉開始予定で、その予備交渉として)大隈を団長とする大隈使節団なるものが内定したが、大久保や岩倉の「策謀」により、岩倉使節団へと転換された、と従来説かれてきた。しかし最近の研究では、大隈使節団ではなく、三条太政大臣を全權使節とし、それに大隈が随行する(三条使節団)構想であり、太政大臣の派遣が困難なことから岩倉使節団へと(自然に)変更されたことが指摘されている(鈴木栄樹「岩倉使節団編成過程への新たな視点」)と説明され

る。

(三) フルベツキの「内々差出候書」

前述のように、久米に課せられた「機密史官」としての「枢密記録」(大使附属枢密記録等可上取調候事・久米美術館蔵「諸辞令写」特命全權大使)の作成については、長崎・致遠館教師フルベツキの助言・「一米人フルベツキより内々差出候書」(『木戸孝允関係文書』)にもとづくものである。(中略)

「内々差出候書」では、「政府報告書は、個人的なもの、個人の出版としない」・「各人の記録には地名・日時・記者を明記」・「文化の進展、経済の發展に資料は見落さぬ」・「帰国後、老練の記者によって編集」・「翻訳者・画工の専門家の参加」・「文体は風味あり清麗なるを要す」などとあるが、久米が選ばれ、目的は果たされたのである。

*参考資料について

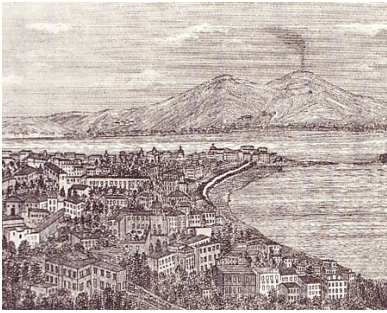
原口敬明氏の翻刻による、「欧米巡遊中の岩倉具視書翰集」、「廃藩置県研究会」創刊号、「岩倉具視関係文書」・全六巻(北泉社)など。なお、「岩倉岩倉具視書翰集」は文書二十八通からなる。

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



ナポリ全景とヴェスヴィオ火山 (『実記』)

■ 第三百三十五回
十一月十日、出席者十名。第八十八名。西班牙及び葡萄牙国ノ略記。使節団が行くことができなかったイベリア半島の二つの国の歴史について検討した。

現在の両国の住民の中核をなす人々は、ケルト・イベリア人である。八世紀、北アフリカのムーア人(西班牙では、モロ人と呼ぶ)が侵入、イスラム文明を齎した。これに対し、キリスト教諸王国は、国土回復運動(レコンキスタ)を続けた。

この間の一六四〇年に、葡萄牙は再独立した。十八世紀に入ると、ハプスブルク朝スペインは断絶、スペイン(王位)継承戦争は、十年余続いた。十九世紀は、「振子政治」の時代といわれる。使節団在欧の間、西班牙は「革命の六年間」といわれる時代であった。

■ 第三百三十六回

一月十四日、出席者十四名。第九十三巻ヨーロッパ商業総論。

商業とは、一つは、物を移動することで品物の価値を高める。もう一つは、斡旋、すなわち仲介の商取引行為である。欧米各国が使節団を歓迎するの、所詮、貿易をした

いがためである。商業こそ欧州発展の要であると述べている。そのために、貿易統計、貿易諸手続き、各種市場などの重要性と、同時に商業ルールと共に、権謀術数の駆け引きの重要性をも説く。

畜と、麦や米の文化が新世界にもたらされて、両世界はグローバル化することになる。黄金のジパングを求めて、コジパング(日本)の金銀銅は、江戸時代には世界一の産出量と貿易量であったこと。ロンドンのコーヒー・ハウスから政党、新聞雑誌のメディア、広告、ロイズ保険会社など資本主義と民主主義の基本となる事柄が発展したこと。紅茶がイギリスの食事文化を生み、ボストン紅茶事件からアメリカの独立にいたる経緯など、物から見た歴史を検証した。

■ 第三百三十七回

二月十日、出席者十四名。第九十四巻地中海航程ノ記。

最後に、久米が使っていた時計はどんな時計だったか。グリニッジが、国際標準時となったのは一八八四年のこと、それまでは世界中が、勝手な時計を使用していたのである。

一行が重い使命を果たした安堵感で全体が表徴されている。即ちマルセイユから日本へ向かう帰国の船旅で、アメリカやヨーロッパ諸国の日夜に亘る各国要人との外交接遇、重商農工を中心とした視察調査等多忙な日程を殆ど実行したと言う思いが、満足感、やり残したことの悔

悟、再訪する可能性が無いかもしれない旅への惜別、帰国後新生日本を築くという壮大な野望等、複雑に心中を去来した事が想像できる。とりわけマルセイユを発ちコルシカ、サルデニア両島を船上から遠望してヨーロッパ大陸最後の地ナポリに足跡を残して、シチリア島に向かう船上での記述は、久米には珍しく感傷的な思いが滲み出ている。

■ 第七十七回

十二月十七日 Ch. 54 Record of the City of Amsterdam

使節一行はオランダ逗留十二日間のうち中日間をアムステルダムでの王宮、美術館、動物園、ダイヤモンド研磨場、運河建設現場等の巡覧や、駐日公使、王族各位主催の晩餐会出席に費やした。

銀器工場では銀の電解法を、動物園では人工孵化の養

魚法を実見した。訪れた美術館(現王立美術館の前身)については、多分現在収蔵されているレンブランやフェルメールなどの名画を見る機会も単に「他ノ記スベキコトナシ」との感想を述べるに留めておられるが、ダイヤモンド研磨場の所では古代支那王翰(六八七〜七二六)の唐詩からの一節「葡萄酒夜光杯」を引用して、夜光杯とはダイヤモンド細工を施した玻璃杯のことと解説している。

■ 第七十八回

一月十四日、Ch. 55 A General Survey of the Country of Prussia

本章はプロシアの地理、歴史、産業を中心に久米が詳細に国情を調査報告した長い章(二十一頁)で、どのテーマも奥が深く、千年にも及ぶ欧州史になつてしまおうので、注記のある部分を中心に森本氏と岩崎氏が手分けして報告した。

久米や翻訳者の勘違いで、方角の間違いや、統計数字の間違いが相変わらず目立つた。たとえば、方向音痴の久米が、東に位置するブランデンブルグを南としたり、羊毛生産高百八十万ポンドを「ton」と誤訳したり、藍の生産地南アメリカをAfricaとして

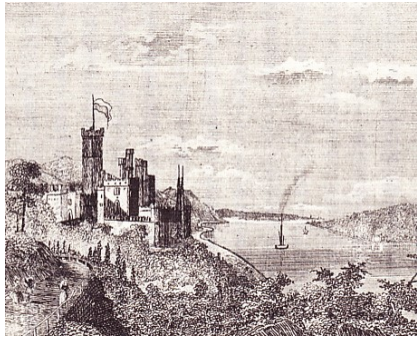
英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp





ドイツのライン川風景(『実記』)

オランダのハーグからベルリンまでの旅行記。途中で急に旅程が変更になり、ベルリンに直行せず、エッセンに立ち寄って一泊した。当時から

Ch. 56 A Record of the Journey by Rail through Western Prussia

■第七十九回
二月十八日、出席者七名、
有名なクルップの製鉄工場、銃砲製造工場などを見学、スケールの大きさに驚く。丁度後装式へと銃砲技術が進歩し、それに伴い戦争の様式まで変わったところであった。軍勢力ではクルップの工場のような産業基盤が背後にあることの重要性を知る。
英仏では商工従事者の比率が高く、原料輸入の加工貿易で付加価値をつける経済構造であり、それに対してプロシヤは農民が人口の半数以上を占め、農牧業が主体で余剰の農業産品の加工輸出で利を得ているだけと観察する。日本の国政、経済開発の方向を示唆する提言をしている。
(文責) 小林 養丈

歴史部会報告

連絡 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp



を父として、一八四四年生まれ。父が藩の勘定方奉行就任のあと、藩内抗争により失脚し、一家離散の目に遭う。一

■歴史人物シリーズ
◎陸奥宗光―近代日本外交の元祖
一月二十七日、出席十八名。講師は会員の永富邦雄氏。陸奥宗光は徳川御三家の一つ、紀州和歌山藩上士伊達宗光

家で伊達から、陸奥に改姓。宗光は十五歳で江戸に出て、漢学塾に入門、桂小五郎・板垣退助・坂本竜馬・勝海舟の知遇を得て、物事の本質を見抜く眼力が培われる。海軍の海軍操練所に入門、幕末の世情を聴く読み、維新政府樹立後、いち早くアーネスト・サトウ経由パークスに面談、その結果、岩倉具視に対し、各国政府には「王政復古樹立と開国政策に転換」の事実を直ちに通告し、各藩には「やむを得ず和親条約を結ぶ」と通達すべしと建言した。
その事務能力を買った岩倉は、彼を外国事務局御用掛に任命した。宗光二十五歳の時である。然し、薩長閥重用の人事に反発、明治二年兵庫県知事に替わり、地方行政の観点から、伊藤博文と相談して廃藩置県を提出、二年後に西郷の採用で実現する。
そのあと、西南戦争に関与の廉で、投獄される。五年間の獄中で、ベンサム、ルソーなど読み勉強する。明治十五年出獄後、伊藤の計らいで欧州に遊学、ロンドンとシユタイン博士から政治学を学び、その後の政治、外交面に役立たせる。帰国後はワシントンに赴任、メキシコ修好条約を締結、翌年懸案のアメリカとの改正通商条約を調印する。帰任後、山県・松方両内閣の

農商務大臣を歴任、伊藤内閣の時に、外務大臣に任命される。四年間に懸案の各国との不平等条約交渉を成功させる。とりわけ日清戦争に際して活躍、戦争勃発から、下関講和条約締結に至る、詳細な外交交渉と戦争に至る経緯は、事後二年して出版された「蹇蹇録」に詳しい。残念ながら、宗光は、この「蹇蹇録」と口述の「後藤伯」を残して、その年、五十四歳で、持病の肺結核により病没した。
また陸奥は、小村寿太郎を見出し重用したことも知られる。
和歌山藩勘定方奉行であった、陸奥の父親・宗弘はペリー来航の五年前に、歴史書『大勢三転考』を出版している。日本の歴史を、姓(かばね)豪族、司(つかさ)官僚、重ね(武家政治)の変転と捉えたもので、当時としては斬新な考え方で、この親あつて、この子ありとの思いを強くする。
陸奥は、幕末から、明治半ばまでの日本を慌しく駆け抜けて、大役を果たした得がたい政治家であった。日本近代外交の元祖と言えよう。
(文責) 小野 博正

◎三井八郎右衛門高棟と団琢磨(二月二十二日)は五頁に掲載

関西支部報告

連絡 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第二十八回例会
十二月三日
開催、出席七名。第二巻英吉利総説。
キリスト教とイスラム教との関係、仏教とヒンドゥー教の関係、係や日本での廃仏毀釈など
明治維新における宗教の側面にも関心が集まった。

ロンドン総説では、テムズ川の河口からロンドン橋まで敢えて橋を架けることをせず、外洋船舶が直接ロンドンまで湖上が可能な都市における海上輸送の重要性に注目している。明治政府は最初の重要な公共土木事業の一つとして大阪と京都を結ぶ淀川の大改修事業を行った。今日でも「淀川のワンド(入り江、淵)」として残っている。
十年前に開通したロンドン地下鉄を仔細に述べているが、火の粉で時折り駅でボヤ騒ぎも起きるといったしるものであったとのことで、流石に乗車することに尻込みしたのか地下鉄の描写に久米邦武流の臨場感に溢れた描写表現がない。いささか寂しさの感を拭えない。
(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会員 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回、全体例会があります。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局 「米欧亜回覧の会」
〒112-0006
東京都文京区小日向 2-26-3 山田方
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。

なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2010年3月～5月の予定です

☆4月全体例会

日時：4月24日(土) 13:30～16:30

テーマ：総会(全体例会)

場所：国際文化会館

会費：1,000円

☆実記を読む会

日時：4月8日(木) 18:00～20:30

5月13日(木) 18:00～20:30

場所：国際文化会館

会費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日時：3月18日(木) 18:30～21:00

4月15日(木) 18:30～21:00

5月20日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館

会費：1,000円

☆歴史部会・歴史人物シリーズ

③横井小楠—維新の群像

日時：4月23日(金) 18:00～21:00

講師：小野寺満憲氏(会員)

場所：国際文化会館

会費：1,000円

④村田省蔵

日時：5月11日(火) 18:00～21:00

講師：半澤健市氏(会員)

場所：国際文化会館

会費：1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日時：4月28日(水) 18:00～21:00

場所：国際文化会館

会費：1,000円

☆関西支部

日時：5月8日(土) 13:00～16:30

テーマ：第30回例会

場所：大阪弥生会館

編集後記

◇新年懇親例会では、オランダ大使館から出席者全員にお土産を頂きました。その中は、オランダと日本の関係を築いてきた歴史的出来事をまとめた資料や日蘭通商四百年記念行事「此処から東京へ」展示会のカタログなどのカラー冊子五点、そして、日本オランダ年・マスコットキャラクターのピンバッジとシールなど。使節団訪問国テーマの「真打ち」に相応しいオランダと日本の交流の深さを改めて感じるお土産でした。ありがとうございます。
◇会員の誘いによって、現役の学生を含む多数の若い世代の姿を新年懇親例会で見ることができました。今後の展開として、当会が積み上げてきた実績を公にすると同時に、いわば「現代語訳世代」からの提案を期待したいものです。
◇ホームページ「会員のページ」内「特別寄稿」に、学生に向けた『実記』の薦め(読む会・鶴飼氏)と会員による研究および使節団の足跡を追う旅の記録を載せました。スペースの制約がある本誌では困難な会員の研究資料やレポートを、今後も掲載していきたいと思えます。ぜひ、お読みください。(N)